

基督教学研究

第 30 号

論文へ特集——ハヤトロギア

- 有賀鐵太郎のハヤトロギアの構想、特質、及び問題点……水垣 涉……1
 遠くて近き神——アウグスティヌスの「在りて在る者」理解……片柳 榮一……27
 ルターとアリストテレス——正義の理解をめぐって……竹原 創一……49
 有賀鐵太郎とカール・バルトにおける出エジプト記三章一四節以下の理解
 ——神学的解釈学および契約史におけるその位置——……掛川 富康……71

研究

- テイリッヒにおける時間と空間の問題——存在論と歴史の関係——……鬼頭 葉子……103
 共同体論の基礎としての「宗教的アプリアー」……小柳 敦史……113
 神秘主義の観点から見た宗教多元主義
 ——東アジアの文化的背景を中心に…………方 俊植……127
 現代神学における神の現実存在の問題
 ——ブラウンとゴルヴィツァーの論争を中心に…………上 原 潔……139
 シュヴァイツァーにおける世界観の問題について…………岩井 謙太郎……153

彙報

彙報

A. 二〇一〇年度基督教教学専修講義題目

芦名定道 教授

系共通講義：「キリスト教教学講義」

特殊講義：「キリスト教と社会理論の諸問題(1)」

特殊講義：「キリスト教思想研究入門」

演習：「日本・アジアのキリスト教——波多野精一(3)——」

演習(前期)：「宗教と科学の新たな関係構築に向けて

——ヒック(2)——」(John Hick, *The New*

Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent.)

演習：「キリスト教思想の諸問題」

演習(後期)：「新約聖書とその思想——政治思想の観点

より——」

土井健司 講師

特殊講義：「古代キリスト教思想の諸相」

今井尚生 講師

特殊講義：「宗教と科学」

濱崎雅孝 講師

演習：「現代の三位一体論」

勝村弘也 講師

語学：「聖書ヘブライ語初級文法」

B. 二〇一〇年度論文題目

修士論文

栗原 崇 「初期ボンヘッファー研究」

松浦 春菜 「マクフェイグの隠喩神学」

南 翔一朗 「カントの実践哲学における悪の問題——Wille および Willkürの概念とその変遷——」

朴 鍾順 「夏目漱石とキリスト教——波多野精一を手がかりに——」

ステイグ・リンドバーグ 「賀川豊彦の思想における「悪概念」

念」

卒業論文

角元良輔 「シュライアマーの宗教論とその現代的意義」

C. 二〇一〇年度研究発表会

第四回研究発表会

二〇一〇年七月十七日(土)、京都大学文学部第二講義室

須藤英幸 「アウグスティヌス『キリスト教の教え』における聖書解釈」

芦名定道 「波多野宗教哲学とその方法論の展開」

第五回研究発表会

二〇一〇年十二月十一日（土）、京都大学文学部第八講義室

森 哲郎 「西谷先生の〈宗教／哲学〉の源泉——〈宗教に於ける自然性〉——について」

方 俊植 「ヒックの宗教論とその意義」

第一号目次

終末論の二類型

武藤一雄

キリスト論の視点

森田雄三郎

初期アウグスティヌスの人間学

金子晴勇

Lumen Christi

佐藤吉昭

ルターの„Obrecht“に関する一考察

早乙女禮子

ルターにおける信仰と礼典

竹原創一

バルト「ローマ人への手紙」における神認識

村山周治

第二号目次

オリゲネスの「キリスト教理解」

水垣 渉

ゲッセマネ

大島征二

神学における言葉の問題

竹原創一

アウグスティヌスにおける

小池三郎

ギリシャ語旧約聖書における

伊藤利行

エルンスト・トレルチにおける

安酸敏眞

„Kompromiss“の概念

シェリングに於ける

「世界経験」について

ルターにおける「外」と

「内」についての一考察

森 哲郎

片柳俊子

第三号目次

キルケゴール研究の方法について

小川圭治

エイレナイオスと聖書

菊地栄三

ティリツヒの芸術神学について

田辺明子

絶対の相の下に

片柳榮一

ルターの律法理解

宮庄哲夫

聖書へブル語統辞論の

勝村弘也

テキスト言語学的考察

勝村弘也

テクニカルな議論

高野晃兆

第四号目次

ルターの解釈学は

「実存論的解釈」といえるか

キプリアナスの教会理解

今井 晋

ノヒリの印度伝道

佐藤吉昭

テンブルックのウェーバー解釈を

塩谷 悟

第五号目次

解釈学的教義学の構成について

森田雄三郎

内村鑑三と「身体の救い」

原島 正

言語芸術作品としての旧約聖書物語テキスト

勝村弘也

エルンスト・トレルチにおける

「歴史の神学」の構想

安酸敏眞

教義学的思考における解釈学的循環の問題

掛川富康

第六号(武藤一雄名誉教授古稀記念

特別号)目次

神学的宗教哲学について

武藤一雄

平石善司

ルターの抵抗権思想における服従の問題

早乙女禮子

創世記テキストにおける語りの技法

勝村弘也

シェリングに於ける神話と世界

森 哲郎

ヘクサプラ断片の残存率について

伊藤利行

アレクサンドリアのフィロンにおける

能動と受動の問題

水垣 涉

奇跡物語へのマジナリア

大島征二

アルバート・シュヴァイツァーの聖餐論への

田辺明子

の新約聖書学的批判

ヨセフスのモーセ物語について

秦 剛平

エイレナイオスの人間理解

菊地栄三

キプリアヌスの『棄教者論』考察

佐藤吉昭

アウグスティヌスの時間論

片柳榮一

ルターにおける「アフェクトゥス」の問題

今井 晋

ルターとアウグスティヌス

金子晴勇

神学的構造主義の問題

森田雄三郎

M・ヴェーバー「古代ユダヤ教」と

高野晃兆

パリアア民族の概念

浄土系仏教とキリスト教の救済論の

原田博充

一異に関する考察

日本の伝統的宗教的心情とキリスト教

名木田薫

との関連について

ウイリアム・ケアリの伝道に対する貢献

塩谷 悟

神概念の転換

小川圭治

第七号目次

ルターと神学的決定論

金子晴勇

Ingo Do.としての精神の自覚の

三一的構造

片柳榮一

脚下照願

武藤一雄

M・ヴェーバー「古代ユダヤ教」と

カスパリの批判(一九二二)

高野晃兆

パウロ・ティリッヒと象徴の問題

芦名定道

第八号目次

キリスト教概念の成立(その二)

水垣 涉

アルベルト・シュヴァイツァーの

「イエス神秘主義」

笠井恵二

シェリング「自由論」再考(二)

森 哲郎

ルターにおける職業観の問題

早乙女禮子

第九号目次

西田幾多郎とキリスト教

小川圭治

R・ブルトマンにとつての

イエスの意義に関して

名木田薫

旧約物語テキストにおける

ヒンネー(見よ)の機能

勝村弘也

シェリング「自由論」再考(二)

森 哲郎

P・ティリッヒの時間論

芦名定道

キエルケゴールにおける

「自己の定義」について

山本忠義

第十号目次

ルターにおける「体験」の問題

今井 晋

——一つの賞書——

シュタウピッツとルターの神秘思想

金子晴勇

ルターとカールシュタット(二)

宮庄哲夫

ルターにおける試練について

竹原創一

神学主義と宗教主義

武藤一雄

オリゲネス「原理論」に於ける

悪の問題序論

久山道彦

キエルケゴール「死に至る病」の

「キリスト教的的理解」

信岡茂浩

第十一号目次

創造と進化——創造における無——

森田雄三郎

ルターとカールシュタット(二)

宮庄哲夫

神言表の可能性とその〈言述的〉

「合理化」の問題

掛川富康

ヘンライスムとギリシャ語聖書

伊藤利行

エラスムスの「敬虔」概念の倫理的基礎

畑 宏枝

第十二号目次

神探求の場の開示

片柳榮一

二つの歴史的社会的イエス研究について

大島征二

「思い煩う」(ルカ二・二二〜三三)

について

田辺明子

レッシングの神学思想——序説——

安酸敏眞

自由意志論争におけるエラスムスとルター

畑 宏枝

アントニオスの修道

竹田文彦

第十三号目次

内村鑑三における「内と外」の論理

原島 正

キリスト教倫理の源泉

名木田薫

七十人訳翻訳史序説(一)

伊藤利行

隠喩と神学的実在論

芦名定道

ニュッサのグレゴリオスの

「鏡における神認識」の存否

土井健司

オリゲネスにおける神のエネルギー

松丸 太

第十四号目次

キルケゴールにおける〈論理的問題〉

林 忠良

罪の自覚——その人間学的考察(一)

内村公義

モルトマンの歴史理解——希望の神学と

現代世界の問題

探求する聖霊——初期オリゲネスにおける

解釈的原理

ニュッサのグレゴリオスにおける「鏡」

久山道彦

の概念について

土井健司

クリュソストモスの解釈学——神理解の

可能性と不可能性の問題を巡って

武藤慎一

伊藤邦幸氏の逝去を悼む

高野晃兆

第十五号目次

罪をおかすことによつて罪から救贖できる？

——ユダヤ教神秘主義の失敗からの

警告——

森田雄三郎

ブルトマンと聖書

笠井恵二

アウグスティヌスの恩寵論

伊藤邦幸

ニシビスのエフライムの解釈学

武藤慎一

P・テイリッヒにおける「カイロス」と

認識の形而上学——歴史的相対主義

今井尚生

の克服を巡って——

『コヘレトの言葉』の構造と思想

——一人称表現の用法をめぐって——

金井由嗣

第十六号 (故武藤一雄名譽教授遺悼号)

目次

- 神・愛・場所——ブーバーから武藤への
接近の一つの試み—— 水垣 涉
- アルバート・シュウマイツァーの聖餐論に
おける問題設定 田辺明子
- 殉教者カルタゴ司教キプリアヌスの
古代殉教観の軌跡 佐藤吉昭
- 古代教会におけるキリスト教経済思想の形成
——トレルチ「社会学説」研究ノート——
高野晃兆
- 二つの恩恵——アウグスティヌス「譴責と
恩恵」—— 片柳榮一
- ルターのキリスト神秘主義 金子晴勇
- 言葉と経験——ルターとディオニシウスの
かわり—— 竹原創一
- 若きレッティングの宗教思想 安酸敏眞
- キリスト教の自然理解について——序章——
今井 晋
- 神の愚かさと人間の賢さ 森田雄三郎
- キリスト教の終末論における将来的な
ものと現在のなもの 原田博充

「キリスト教と仏教」に関する若干の考察

名木田蕉

笠井恵二

モルトマンの聖書理解 M・ブーバーとハシダイズム 早乙女禮子

Wie wird man seiner Hingeburt gewiß?
——Eine Untersuchung zum Reinen

Land Buddhismus der Heian und

Kamakura Zeit ヌルティン・レツッ

第十七号目次

ルターの神観における神秘的なるもの

金子晴勇

ルターの詩篇解釈における語り手の問題

竹原創一

エラスムスにおける「反野蠻人論」と
ヒューマニズム 畑 宏枝

「ベルシャの賢者」アフラハトの解釈学

武藤慎一

テイリッヒ「教義学」における歴史の問題

今井尚生

この世界への、この世界からの脱出
——ハンナ・アーレントのアウグス
ティヌス解釈 片柳榮一

エラスムス「現世の軽蔑」に関する一考察
——その執筆動機と思想—— 畑 宏枝

ルターの詩篇解釈における悔い改めと沈黙
——第四編五節の「悔い改めなき」
(PsG)と「沈黙なき」(Psh)の
解釈をめぐる—— 竹原創一

レッシングにおける真理探求の問題 安酸敏眞

レッシングにおける神の下降と
人間の上昇——解釈学的観点から——
武藤慎一

一試論—— 土井健司

クリュノストモスにおける神の下降と
人間の上昇—— 勝村弘也

聖書における沈黙について 伊藤利行

生成の論理と存在の論理
——古代キリスト教思想の解釈への
一試論—— 土井健司

第十八号 (水垣涉名譽教授遺官記念号)
目次

- 応報か、行為・帰趨連関か？ 勝村弘也
- 聖書における沈黙について 伊藤利行
- 生成の論理と存在の論理
——古代キリスト教思想の解釈への
一試論—— 土井健司
- クリュノストモスにおける神の下降と
人間の上昇—— 勝村弘也
- 聖書における沈黙について 伊藤利行
- 生成の論理と存在の論理
——古代キリスト教思想の解釈への
一試論—— 土井健司
- この世界への、この世界からの脱出
——ハンナ・アーレントのアウグス
ティヌス解釈 片柳榮一
- エラスムス「現世の軽蔑」に関する一考察
——その執筆動機と思想—— 畑 宏枝
- ルターの詩篇解釈における悔い改めと沈黙
——第四編五節の「悔い改めなき」
(PsG)と「沈黙なき」(Psh)の
解釈をめぐる—— 竹原創一
- レッシングにおける真理探求の問題 安酸敏眞

キェルケゴールの「罪」理解——「死に至る酒」を手掛かりに
山本忠義

価値および意味と宗教の問題——トレルチ

およびティリッヒの思想を手掛かりとして——
今井尚生

現代キリスト教思想における

終末論の可能性

声名定道

明治キリスト教と朝鮮人李樹廷

金 文吉

“Hahlogia” als die wissenschaftliche

Konzeption Tetsutaro Arigas · Zunn

Problem der Interpretation von Ex. 3,

14ff. als theologisch-hermeneutischer

Methode für die Theologiegeschichte

掛川富康

オリゲネス「原理論」における本性と被造性

久山道彦

第十九号目次

キリスト教古代の女性殉教者再考(一)

佐藤吉昭

第一次ユダヤ戦争に見るフィロカイサル

秦 剛平

たちとその系譜

アフラハトにおける神の下降と人間の上昇

—— 解釈学的観点から —— 武藤慎一

ササン朝ペルシアにおけるキリスト教徒

迫害と「エデッサ殉教者伝集」 竹田文彦

「エレミヤの告白」における

呪いの言葉めぐって

大石祐一

知恵の人格性と一人称表現——箴言八章

一二節「私は知恵」の理解——

金井由嗣

ヒッタ宗教的多元論の科学的構造

小倉和一

トレルチとカルヴィニズムの社会哲学

第二十号目次

—— デモクラシーとの関連に

注目して ——

トレルチとセバステイアン・フランク

高野晃兆

テイリッヒの生の次元論における一問題

—— 統一概念の周辺 —— 安酸敏眞

シュライエルマッハーの「信仰論」における

罪理解 帆刈 猛

ひとり立つ人格と真の交わり

—— キェルケゴールの「単独者」の思想を媒介として —— 原田博充

真理の多形性——ドイツ文化プロテスタン

ティズムの今日的意義について ——

フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ

表現主義とテイリッヒの視覚芸術論

表現主義とテイリッヒの視覚芸術論 川桐信彦

伝記的記述の客観性について

—— E・フツシュ「K・バルトの生涯」をめぐって ——

小川圭治

森田雄三郎氏の逝去を悼む

めぐって —— 高野晃兆

「緊張」について

第二十一号目次

—— キリスト教思想研究の方法に

ついての一つの省察 —— 水垣 渉

K・バルト「教会教義学」における

「キリスト——信仰」について

—— 実存と救済史との一体性という

観点から —— 名木田薫

罪の自覚 —— その人間学的構造(二)

名木田薫

罪の自覚 —— その人間学的構造(二)

内村公義
「宗教哲学の新しい可能性」について

——武藤一雄名誉教授の学問的立場を
めぐる断想(その二)—— 今井 晋

同性から複数性へ——ジョン・ヒックの
キリスト論—— 小倉和一

反省と顕現——リクールの宗教言語論の
構造について—— 佐藤啓介

懐疑者の義認——前期ティリッヒの
義認理解—— 近藤 剛

偽ディオニュシオス・アレオパギテース
——『神名論』第二章における
神の統一と区分—— 大月栄子

第二十二号目次

人間の内の恒久なるもの
——アウグスティヌスの
「神の似像」理解—— 片柳榮一

キリスト教における性の問題
内村鑑三における「神・人・自然」 筈井恵二

宗教的複数主義とパトナムの
原島 正

プラグマティックな實在論 小倉和一
神名再考——出エジプト記三章一四節の
統語論的考察—— 大石祐一

聖書、解釈、自己、行為——リクールの
聖書言語論の社会思想的射程—— 佐藤啓介

初期ティリッヒの思惟構造
——二元論——二元論 モデル—— 近藤 剛

ティリッヒにおける宗教社会主義の
神学的意義——ティリッヒ・ヒルシュ
論争をめぐって—— 岩城 聡

マルキオンにおける創造と悪
——テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』
をテキストとして—— 津田謙治

第二十三号目次

キルケゴールにおける「Continuum」の問題
シユヴァイツァーとアイヒホルン 林 忠良

——聖餐をめぐって(一) 田辺明子

神学と宗教学——両者が困難を越えて

関係を結ぶための暫定的な覚書——
クリストフ・シユヴェーベル

リクールの贈与論
——倫理の源泉としての贈与の経緯—— 佐藤啓介

神秘主義と罪責意識のアンチノミア
——初期ティリッヒのシェリング解釈—— 近藤 剛

類似しない類似
——神への上昇の偽ディオニュシオスの
方法—— 大月栄子

二つの「義の神」像——プロレマイオスと
マルキオンにおける解釈をめぐって—— 津田謙治

アレイオス主義における神論と
救済論についての一考察 大橋仁夫

理解のための思考
——ハンナ・アレントの『精神の生活』
における「思考」の意義—— 今出敏彦

キリスト教思想と形而上学の問題 芦名定道

第二十四号目次

田村直臣の「児童中心のキリスト教」

帆船 猛

四世紀イラクにおける地域文化としての

キリスト教——そのマイノリティー

としての自己意識—— 武藤慎一

初期ティリッヒ「組織神学」構想の意義

近藤 剛

神を映し出す鏡——偽ディオニュシオス・

アレオバギテースにおける天上の

存在者の位置づけ—— 大月栄子

テルトゥリアヌスとマルキオン・カノン

——「異端者への抗弁」と「マルキオン反駁」

における異なる論点を巡って——

津田謙治

人間の生に仕えるものとしての精神の生

——ハンナ・アレントの

「精神の生」の構想—— 今出敏彦

後期ティリッヒにおける歴史をめぐる問題

——問いの構造について—— 鬼頭素子

内村鑑三の「近代批判」と再臨運動

——社会から個人へ、

そして再び社会へ—— 岩野祐介

第二十五号（水垣渉名誉教授古稀記念号）

目次

アウグスティヌスの「知ある無知 *docta*

ignorantia」 片柳榮一

ホワイトヘッドの形而上学とプロセス神学

—— 芦名定道

旧約聖書での啓示体験（序論）

—— 日本的性情との関わり—— 名木田薫

パッチュの聖餐研究における類比の問題

——ヘレニズム起源の類比について—— 田辺明子

オリゲネスにおける戦争倫理学

—— 古代キリスト教における

宗教的生の一断面—— 久山道彦

ニシビスのエフライムにおける神学的

アプローチ——シリア・キリスト教

の意味するもの—— 竹田文彦

クリュノストモスのエウドキア（神の喜び）

理解—— 影響作用的聖書解釈の

試み—— 武藤慎一

詩篇解釈をめぐるルターとカルヴァン

—— 竹原創一

キェルケゴールの「自由の可能性」

——「永遠的なもの」を指して——

山本忠義

トレルチと「キリスト教学」の理念

罪の自覚 安酸敏真

——その人間学的構造 (三) 内村公義

ありてある哲学者の神

——マリオンとリクールの思索を

手がかりに—— 佐藤敏介

聖書の伝統とその周辺における「わたし」

と《自己》の問題 水垣 渉

——

——

第二十六号目次

ヨブ記解釈の諸問題—— 文芸作品として

のヨブ記—— 勝村弘也

ニユッサのグレゴリオスによる説教「施し」

—— 土井健司

アウグスティヌスの予定論

——セミペラギアニスムス論争に

関する試論—— 小池三郎

偽ディオニュシオス・アレオバギテースに

——

おける神の隠れと闇 大月栄子

無からの創造——古代教父思想における

神の超越性—— 津田謙治

行為の源泉としての意志

——ハンナ・アーレントの行為概念

再考—— 今出敏彦

パウル・ティリツヒの聖霊理解——霊の

普遍性・創造性について—— 鬼頭葉子

内村鑑三における信仰と愛との関連

——個人の信仰、隣人愛から

社会性へ—— 岩野祐介

パネンベルク『神学的観点における人間学』

(一九八三年)の中心課題 濱崎雅孝

第二十七号目次

自然神学の新たなフロンティア

——脳と心の問題領域—— 芦名定道

著作『反復』の成立——キルケゴールの

〈反復〉の思想 序説—— 林 忠良

『緊張』について——キリスト教思想研究の

方法についての一つの省察——(承前)

水垣 渉

M・ブーバーにおけるハシデイズム的

神秘主義と我—汝思想 堀川敏寛

「倫理学の根本問題」におけるトレルチの

思想体系 小柳敦史

第二十八号(片柳榮一名誉教授退任

記念号) 目次

人格と人格を越えるもの

——西田哲学とキリスト教をめぐる

一考察—— 片柳榮一

パッチュの聖餐研究における類比の問題

——旧約聖書のユダヤ教的類比

について—— 田辺明子

古代教父思想における〈時間〉概念

——エイレナイオス『異端反駁』の議論を

中心として—— 津田謙治

ヨアンネス・クリュソストモスの神人共働論

儀礼におけるキリスト——偽ディオニュ

シオス・アレオパギテースにおける

キリストについての一考察——大月栄子

ルター『詩編解釈』における〈情動〉について

初期シュライエルマツハーの〈教養〉概念

帆刈 猛

トレルチの『社会教説』と〈社会学的

基本図式〉 高野晃兆

近代キリスト教と政治思想

——序論的考察—— 芦名定道

感情の芸術性と宗教性——ハイデガーの

情感性論を起点として—— 川桐信彦

アーレントのアウグスティヌス解釈

今出敏彦

はじまりはいつも悪——リクールにおける

創造論の展開—— 佐藤啓介

第二十九号目次

前期アルトマンにおける神学と哲学について

大島征二

Th・マンとM・ルター——一つの試論の

ための予備的考察—— 掛川寛康

アーレントの『全体主義の起源』再読

——『人間の条件』へ 今出敏彦

E・トレルチの思想展開における「本質」

概念の位置づけ

小柳敦史

アウグスティヌス『シンプリキアヌスへ』

における「相應しき呼びかけ」(vocatio

congruens)と自由意志

須藤英幸

ジョン・ヒックの神義論

方 俊植

II コリント五・三における読みの問題

田代英樹

京都大学基督教学会規約

- 一、本会は京都大学基督教学会と称し、事務局を京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科キリスト教学研究室に置く。
- 二、本会は基督教学研究の進展を目的とする。
- 三、本会は前条の目的を達成するために以下の事業を行う。
 - (一) 研究会、講演会などの開催
 - (二) 学会誌『基督教学研究』の発行
 - (三) 内外の研究機関及び研究者との相互交流
 - (四) その他の必要な事業
- 四、本会は基督教学の研究に従事する者、もしくは本会の趣旨に賛同する者をもって構成する。
 - (一) 一般会員
 - (二) 学生会員 大学院学生及びこれに準ずる者。
 - (三) 会友 本会の趣旨に賛同するもので、研究会会での発表の機会と学会誌の配布を受けることができる。

会友希望者は、委員会の承認により会友となることができる。一年以上会友であった者で、会員になることを希望する者は、会員一名の推薦により委員会の議を経て、総会で承認を受けるものとする。
- 五、本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもってこれに充てる。
- 六、本会の運営のために次の委員を置く。
 - (一) 代表者 (一名)
 - (二) 委員 (若干名)
 - (三) 監事 (一名)
- 七、本会は毎年総会を開き、会計及び一般報告を行い、必要事項を協議する。
- 八、本規約は運営委員会の発議に基づき、総会において変更することができる。

附則

本規約は一九九八年十二月施行、二〇〇八年七月改訂。

運営委員会

代表者…高野晃兆
 委員…林 忠良、片柳榮一、宮庄哲夫、勝村弘也、
 芦名定道、竹田文彦、武藤慎一
 監事…水垣 涉

執筆 者

水垣 涉	京都大学名誉教授
片柳 榮一	聖学院大学大学院教授、京都大学名誉教授
竹原 創一	立教大学教授
掛川 富康	茨城キリスト教大学教授
鬼頭 葉子	京都大学大学院文学研究科後期課程修了
小柳 敦史	京都大学大学院文学研究科後期課程
方 俊植	京都大学大学院文学研究科後期課程
上原 潔	京都大学大学院文学研究科後期課程
岩井 謙太郎	京都大学大学院文学研究科後期課程

『基督教学研究』投稿規定

- 一、寄稿者は本学会員にかぎる。
- 二、内容は未発表の学術論文であること。採否ならびに掲載の時期は、査読委員による査読の報告に基づき、編集委員会が決定する。
- 三、寄稿原稿は、論文については四〇〇字詰原稿用紙四〇〜五〇枚（註・図表などを含む）相当、研究については三〇枚相当とする。
- 四、寄稿原稿の執筆細目および査読審査規定については、別途原稿執筆要項等の内規にて定めることとする。
- 五、寄稿原稿には、欧文タイトル、執筆者欧文氏名を付記すること。
- 六、原稿が採用された場合、執筆者には抜刷三〇部を贈呈する。

（本規定は二〇〇〇年十二月十六日から施行する）

第三十号編集実務委員会

高野晃兆
林忠良
片柳榮一
宮庄哲夫
勝村弘也
芦名定道
竹田文彦
武藤慎一

二〇一〇年十二月二十日印刷
二〇一〇年十二月三十日発行

定価一五〇〇円

発行者

京都大学基督教学会
京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科
キリスト教学研究室内

発行人

高野晃兆

発売元

(株)一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10

印刷所

(株)アイワード

本誌の御註文は、最寄のキリスト教書店、
もしくは、右記、京都大学基督教学会（振
替〇〇一〇三〇一五―七二〇七）へ、定価一
五〇〇円（送料当方負担）を添えてお申込
みください。

JOURNAL
OF
CHRISTIAN STUDIES
KIRISUTOKYOGAKU KENKYU

Vol. 30

December, 2010

Contents

- Hayathology of Ariga Tetsutaro: Its Design, Characteristics
and Issues*MIZUGAKI Wataru
- Der ferne und nahe Gott—Augustins Interpretation von
Exodus 3, 14-15*KATAYANAGI Eiichi
- Luther and Aristotle—A Comparative Study of their Understanding
of Justice*TAKEHARA Soichi
- Die Interpretation von Ex. 3, 14f. bei T. Ariga und K. Barth—
theologisch-hermeneutisch oder bundestheologisch interpretiert*
.....KAKEGAWA Tomiyasu
- Time and Space in the Thought of Paul Tillich—The Relation
of Ontology and History*KITO Yoko
- „Das religiöse Apriori“ als die Grundlage der Gemeinschaftstheorie*
.....KOYANAGI Atsushi
- Religious Pluralism from the Mystic Perspective—An Examination
from within the Context of East Asian Culture* ...BAHNG Junsik
- Problematik der Existenz Gottes in der modernen Theologie—
im Streitgespräch zwischen H. Braun und H. Gollwitzer*
.....UEHARA Kiyoshi
- Über das Problem der Weltanschauung bei Albert Schweitzer*
.....IWAI Kentaro

THE SOCIETY OF CHRISTIAN STUDIES
KYOTO UNIVERSITY

Kyoto Japan